

Ⅱ部 上中城跡と京北の文化遺産

下弓削銅鐸と京北の地域的特性

國下多美樹

はじめに

上中城の営まれた弓削盆地における歴史を振り返ると、中世前期以前にすでに多くの遺跡が密集し、早くから開発進められた土地であることが知られる。弓削地域を含む京北盆地の南端、盆地への入り口にあたる周山においても古墳時代後期から飛鳥時代にかけての集落が成立し、ほどなく周山瓦窯、周山廃寺の成立があった。そして、戦国時代にはその山上に周山城が築かれたのである。周山は、交通の要としての伝統性ゆえ、飛鳥時代後期から奈良時代にかけて、政治的、経済的に優位性をもつこととなったことが遺跡の形成を導いた理由とみられる。このように周山盆地の各所における、小地域個々の地域的特性の解明が重要な課題になる。

そこで、本稿では遺跡がどのような歴史的脈絡で小地域に形成されたのか、という視点に立って、上中城跡がこの場所に築造された背景を検討課題とする。その分析のために、弥生時代の銅鐸埋納地とみられる下弓削銅鐸、および上中城周辺の遺跡群の動向を題材に課題の解明を行いたい。

1. 下弓削銅鐸の評価

銅鐸発見地 上中城跡の南 900m 付近は、下弓削から狭間峠を経て東方の塔の地に抜ける道の入り口南斜面に位置し、かつて銅鐸が発見された伝承をもつ下弓削銅鐸出土地である。周知の埋蔵文化財包蔵地であるが、正確な場所が明確でないため広い範囲が推定地となっている。

このいわゆる下弓削銅鐸は、現在、辰馬考古資料館で所蔵・保管されている。2016 年 6 月、この実物を調査する機会を得た。その所見をもとに銅鐸発見地の意味を考える。

下弓削銅鐸を考古学会に初めて紹介したのは、梅原末治である（京都府 1926）。その報告文に拠ると、出土地の同定は銅鐸を収めた箱蓋の次のような由緒書によったようである。

傳曰文久元年八月獲之
於丹波桑田郡下弓削
村山中老樹之本
明治十九年一月
鐵齋題

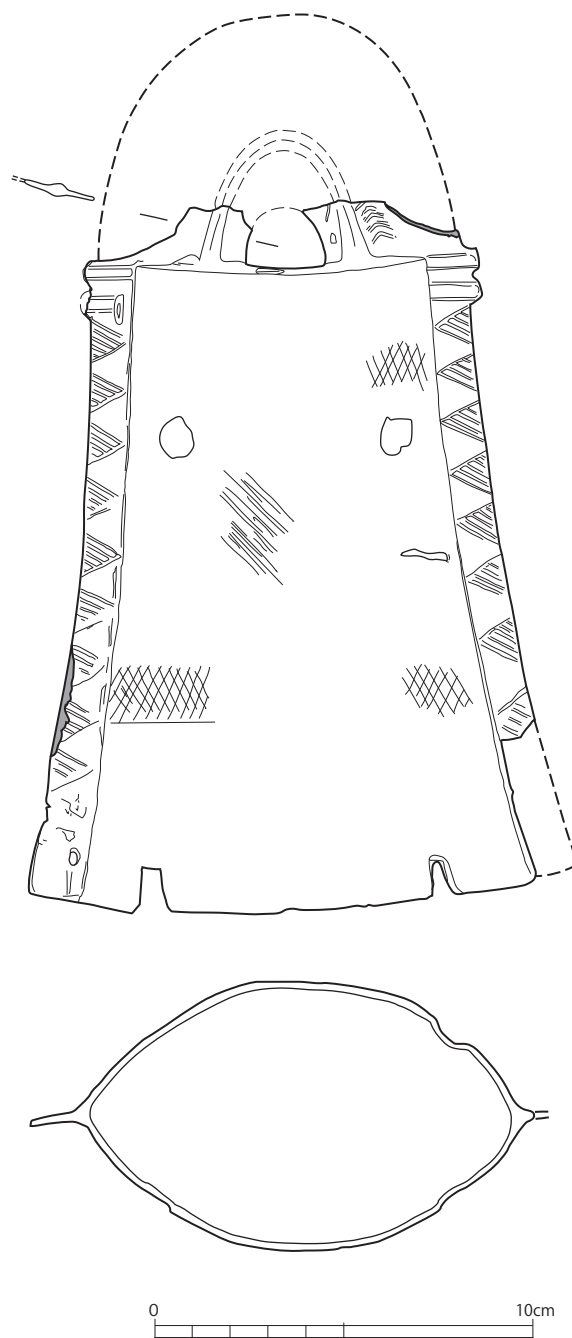


図 25 下弓削銅鐸実測図（國下実測、前田詞子トレース）



図 26 下弓削銅鐸 左：b面 右：a面（辰馬考古資料館提供）

すなわち、文久元年(1861)8月に桑田郡下弓削村の山中の老木根元から出土したものと記されている。記したのは、当時の所蔵者である富岡鉄斎である。由緒の箱書き内容は梅原氏の判読通りであった。梅原氏は報告で、この銅鐸所蔵者について、富岡鉄斎からいつの日か田中光顯へ、そして奈良の玉井久次郎へと所蔵者が転々と移動したと述べている。それを知った経緯まで詳しく述べられていない。最終的に辰馬資料館に保管されることになったのは、辰馬悦藏翁が鉄斎と親交が厚かったことによるのであろう。⁽²⁾ 発見地についての情報はこれ以外に残されていない。

扁平鈕式4区袈裟襴文銅鐸 銅鐸は、釣り手と鰭の一部が欠けている。文様のよく判別できる面をa面として実測した。残存高は18.6cmで、実測図から鈕を推定すると23.7cm前後になる。身の幅は、13.5cm、厚さ7.2cm。鈕は基部のみ残るが、内縁と外縁を残し扁平鈕式であることが確定する。鈕内縁はヒキによる穴が開く。鈕外縁には綾杉文帯が残る。

身部のa面は、斜格子文が左下、右下、右上の3箇所を確認できるので4区袈裟襴文とわかる。型持ち穴は不整形～台形である。b面は摩耗して肉眼で文様は判読ができない。中央に横方向の新鮮な直線的な傷があり、農具痕と推定される。

鰭部は、4条ないし5条を単位とする鋸歯文Rが施される。a面には少なくとも9単位あり、下端の身近くに楕円形のヒキがある。また、a面右下部は欠損する。鰭部上端に2個一対の耳部がある。

内面凸帯は、ほとんど摩滅していない。

以上の特徴から、本銅鐸は扁平鈕I式4区袈裟襴文銅鐸であり、弥生時代中期後半の所産と推定される。

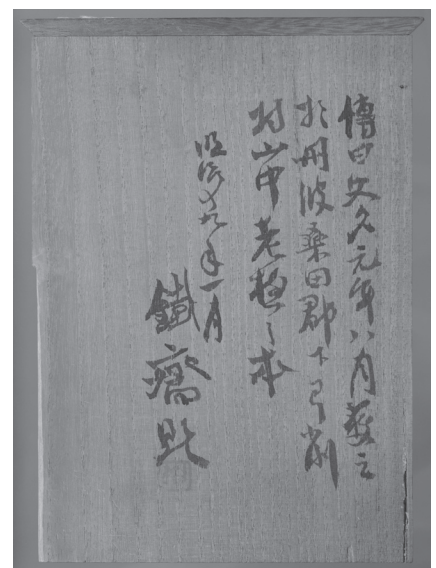


図 27 下弓削銅鐸箱書（辰馬考古資料館提供）

2. 弥生時代社会と境界性

弥生集落の動向 本銅鐸は銅鐸祭祀の終焉や祭式の変化を契機に埋納されたのであろうが、当時、どの集団が銅鐸祭祀に関わっていたのであろうか。また、なぜこの場所に埋納したのであろうか。

銅鐸祭祀は、本来的に地域内の複数の集団をまとめる農耕祭祀の道具であるから、一定の規模をもつ集団を想定することが多い。当地の場合、銅鐸出土地の北約 800m 地点にある上中遺跡、上中・太田遺跡、南東 2 km の塔遺跡がまず関係する遺跡として挙げることができよう。ただし、下弓削銅鐸の年代である中期後半の弥生集落はほぼ皆無に近い状況である。上中遺跡では流路跡や土坑などの遺構はあるが生活実態が明確ではない。縄文時代、弥生時代後期末の土器等遺物が一定量出土し、断片的ながら弥生集落の存在を見込める程度である。一方、銅鐸発見地から谷を南東に進んで東の盆地に出た所に所在する塔遺跡で、銅鐸の時期よりも古い弥生時代中期前葉の遺物が出土している(図 28、小池 1995)。

京北の盆地内では、周山地域の卯瀧谷遺跡で前期の土器が採集されているよう⁽³⁾で、その集団は塔遺跡を成立させた可能性が高いであろう。従って、現状では弥生時代の前半期は南部の周山地域に弥生時代集落がまず成立したことになる。これは大堰川水系によって南西の亀岡盆地から弥生文化が跛行的に波及したと見るのが自然であろう。亀岡盆地では、前期から中期初頭の環濠集落である太田遺跡をはじめ、中期以降も拠点的な集落が展開し、より山間部への入り込みがあったのであろう。上中周辺に中期集落が存在したとすれば、周山地域からの移動か南丹地域からの山道を介しての文化移入のいずれかが想定できるが、後者は弥生時代の実態が十分に判明していないから想定の域を超えない。このような盆地周辺の遺跡群のあり方から、銅鐸埋納は京北盆地内の集団のみならず、さらに広域的な空間に居住した弥生集団の境界に関わる可能性を推定できる。

境界性をもつ埋納 改めて、近畿地方の弥生時代集落と銅鐸の分布を重ねて検討してみよう(図 29)。下弓削銅鐸の埋納地は、南丹波地域で唯一の発見地であると同時に、近江と南丹波中心地域(大堰川水系)の中間点付近、あるいは北丹波地域との境界にあたる場所であるように見える。要するに、境界性を有する場所に埋納したのではないかと推察する。

境界性を有する場所に銅鐸を埋納する現象は、西日本各地で見られるが、同じ京都市右京区の周山街道添いで発見された梅ヶ畑銅鐸も同様の事情で埋納されたのではないかと考える。梅ヶ畑銅鐸は、太秦から山越えと呼ばれる切り通し道(梅ヶ畑山越線)を登り切った標高 130m の北嵯峨丘陵頂部よりやや下がった南斜面で発見されている。銅鐸 4 点(1～4 号鐸)は中型鐸に小型鐸を入れ子にして埋納されていた。1・2 号鐸は、外縁付鈕 2 式、3・4 号鐸は外縁付鈕 1 式であり、遅くとも 2 式段階の銅鐸埋納を示唆する。注意したい点は、まず 4 号鐸は、島根県荒神谷 2 号鐸と同範と判明していることで(難波 2005)、2 号鐸と共通する外縁付鈕 1 式の 4 区袈裟襷文は縦横帯と身の側縁間に界線を有する中山型と称される同一工人の作とされる(難波 2006)。出土地の明確でないものを除き、中山型の分布を見ると、兵庫県中山 1・2 号鐸、福井県米ヶ脇鐸、和歌山県太田黒田鐸、島根県加茂岩倉 4・7・19・22 号鐸があり、兵庫県南部、大阪湾岸から京都盆地北西隅、そして山陰、北陸地域となる。すなわち、梅ヶ畑銅鐸の古段階資料は銅鐸祭祀の波及経路と関係する可能性が高く、いわゆる周山街道を介して山陰に抜ける道が選ばれた可能性を示唆する。



図 28 塔遺跡の弥生土器(京都府センター 1995)

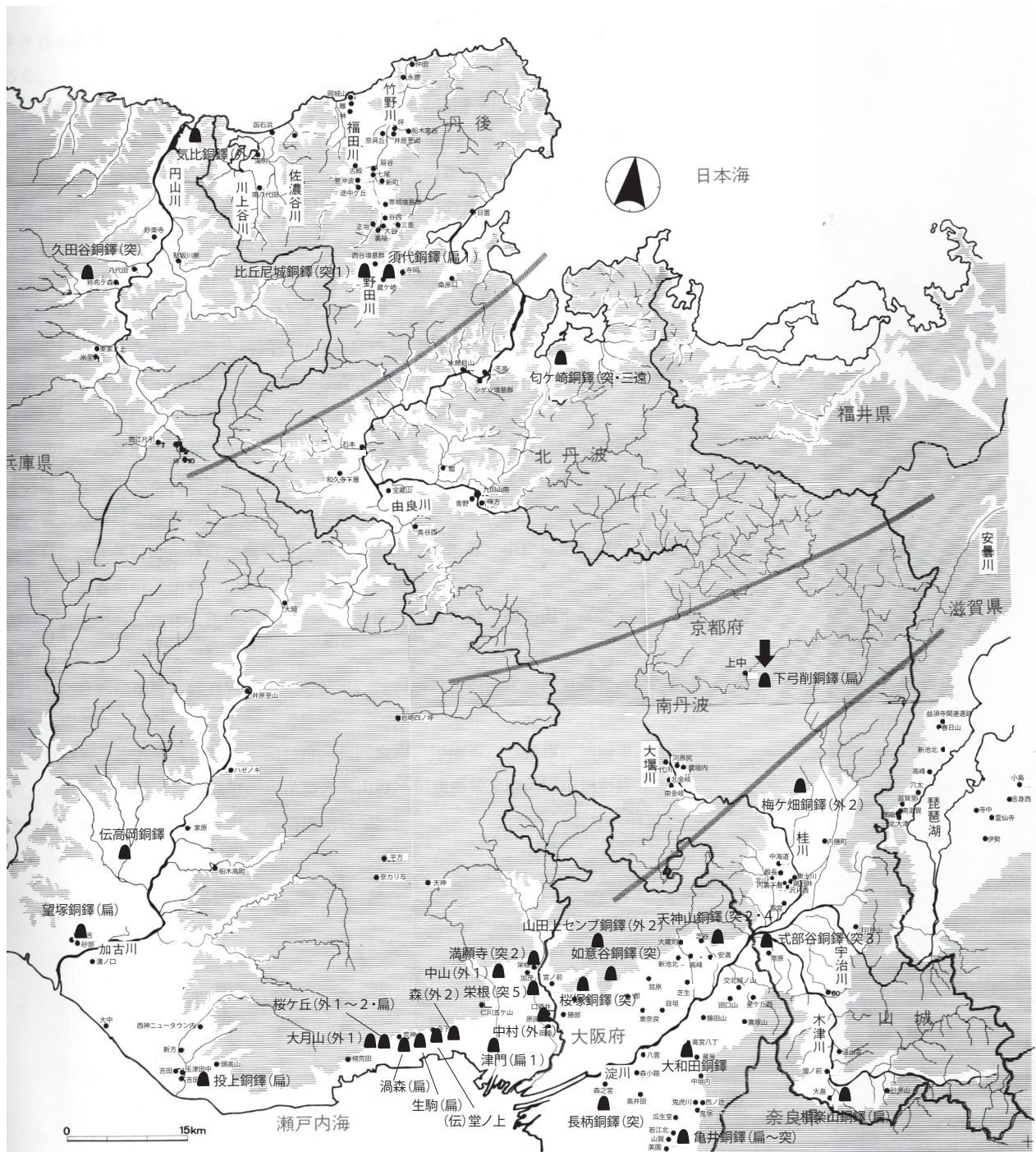


図 29 近畿の弥生時代遺跡分布図(京都府センター1989に加筆)

奇しくも次の段階には上中において下弓削銅鐸が埋納されたことも前代のこの動きと関係しているものとみて良い。要するに、山陰地方との強い文化的交流が周山盆地を経由していた可能性を示唆するものと言える。

このように見てくると、京北盆地の北部の下弓削一帯は弥生時代中期初頭から中期後葉の時期に東西、南北の交流点であり、南丹波の北端としての境界の地であったと推測できるのである。

一方、銅鐸の埋納は中期までの銅鐸祭祀の終焉あるいは更新と見ることもできる。近畿地方では後期になって遺跡の動向に変化が生まれた。中期の大集落は解体し、中小の集落が散在するようになり、立地も低地のみならず高地にも居住域を広げる地域が増えた。青銅器は新式の突線鈕式銅鐸が作られはじめる一方で、青銅製鏡(中国鏡、小型仿製鏡)が普及、鉄器の生産や普及も始まる。下弓削銅鐸の埋納時期が仮に後期初頭の埋納とすれば、このような西日本を巻き込む大きな社会的変動と関係したものと考えられる。

境界意識とその後の展開 以上のような弥生時代における境界性という特色はその後にも維持され続けたものと推定している。上中城の所在する上中太田遺跡では、古墳時代前期以降、奈良・平安時代と継続的な居住地として利用さ

れた。特に奈良時代では、墨書土器、緑釉陶器をなど官衙的性格が明らかになりつつある。従って、地域内では政治性を帯びた境界として引き継がれたのである。そして、平安時代末から鎌倉時代から室町時代までほぼ遺跡は継続し、輸入陶磁器を一定量有するほど経済力が伸長し上中城という城館が成立したのである。上中城に残る小字「城下町」、あるいは北東、周山街道に東面する場所に残る小字「制札」地名は近世以降も政治的、行政的な空間として意識され続けたことを証左するのである。すなわち、弥生時代以来の広域的な境界意識は、その後も引き継がれ、丹波・丹後・近江の諸地域との官道の交差点として、上中地域が明確な性格を付与されることになった。とりわけ古代以降、常に王権と平安京という大都市との関係を保ち続けたところに地域的特性を維持できた背景を読み取ることができたのである。

古代ないし以前の地域社会における境界性がその後も強く意識される現象は、各地でも散見される。例えば、筆者がフィールドとしている京都盆地西南部の乙訓地域北部、中海道遺跡（向日市物集女町）は、弥生時代後期から古墳時代前期の大集落であり、庄内式期の大形建物と多数の住居跡から居館跡と見られている。この集落の中心域は奈良～平安時代の遺構・遺物が密集して発見され平安京近郊の貴族居住地ないし寺院跡の存在が見込まれ、乙訓地域内で傑出した様相を示す。さらに中世は物集女荘関連の集落として展開し、戦国時代には堀と土塁を巡らせた城館跡、物集女城が成立した。物集女城は、中世の南北幹道である物集女街道と少なくとも近世に遡ることが明確な京都伏見から洛西、丹波に抜ける東西の幹道（いわば山陰道）の交差点南西に設けられている。中世の物集女における市の記録から交通拠点であり経済拠点であったことがわかる。伝統的な政治性と共に、交通拠点としての利権が物集女城の城主物集女氏の存在基盤であったと見られる。

長岡京の南西部の友岡の地は、白鳳時代以来の古代寺院がある。この地は長岡京遷都後、右京域の実質的南限となり、南郊から山陽道を使って長岡京内に入る境界に位置することとなった。そしてその北東の右京六条二坊に都城の公営市場である西市が開かれたのである。また、長岡京の南西、山崎の地は、古代依頼、水陸の交通の要として機能した土地としてよく知られている。奈良時代は、山陽道と南海道の交差点となり行基によって山崎橋が架けられ、橋寺である山崎院が造営された。山崎津も長岡京遷都以降、水運の港としての機能が高まり、山崎の地は交通拠点としての境界性を強めるのである。

境界性が形成される場合は、水運、陸運の交通拠点である場合が多く、市や巷が形成され多様な階層が集まる空間が形成された。それゆえ、宗教拠点としての寺院や神社が生まれるのである。

京北の地域性とは、狭隘な盆地地形に交通拠点としての歴史的境界性を常に内包する点にあると整理できよう。

まとめ

以上述べた点を整理してまとめとする。

- （１）下弓削銅鐸発見に至る基礎的情報を整理し、資料観察を通じて型式、年代観を述べた。
- （２）下弓削銅鐸出土地が埋納地であった可能性を示し、梅ヶ畑銅鐸埋納地との比較から山陰への銅鐸祭祀の伝播経路に位置すること、近江・南丹波の中間的位置にあること、境界性と関係する可能性を示した。
- （３）この境界性は近畿各地の事例でもみられ、古代以降引き継がれていることを指摘した。そして、この歴史的境界性が京北の地域性であると述べた。

補注

- （註１）2016年6月、辰馬考古資料館（兵庫県西宮市）で資料調査した。同館学芸員、青木政幸氏のご協力を得た。その成果の一部は、既に地域の情報誌に紹介している（國下2016）。この度、資料調査時の実測図をトレースし、この機会に合わせて銅鐸の写真を提供いただいた。記して感謝申し上げたい。
- （註２）直接資料がないが、その可能性が高いであろうとのご教示を青木政幸氏よりいただいた。
- （註３）卯滝谷遺跡は、周山地区卯滝に位置する。弓削川下流の右岸にあたる遺物散布地で、現状は府道佐々江・京北線北側の水田である。東西約350m、南北約100mの範囲として周知されている（奥村1986、加納・津々池2006）。

引用文献

梅原末治 1926「北桑田郡 第七 下弓削発見ノ銅鐸」『京都府史蹟勝地調査会報告 第7冊』、京都府

下弓削銅鐸と京北の地域的特性

- 岡崎研一・細川康晴 1988「上中城跡第5次」『京都府埋蔵文化財調査概報』第27冊（財）、京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 奥村清一郎 1986「周山盆地の遺跡」『日本の古代遺跡 27 京都 I』、保育社。
- 加納敬二・津々池惣一 2006「右京区京北の遺跡分布調査」『京都市内遺跡分布調査報告 平成17年度』、京都市文化市民局（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989『京都府弥生土器集成』
- 國下多美樹 2016「なぜ？なに！京北考古学研究（3）」『あうる京北 友の会だより』161号
- 國下多美樹 2020「古代地域形成論－受け継がれる時空間の意識－」『泉森皎先生喜寿記念論集』
- 小池寛 1995「塔遺跡発掘調査概要」『京都府埋蔵文化財調査概報』第64冊、（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 難波洋三 2005「神庭荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡」『ドイツ展記念概説 日本の考古学』上巻、学生社
- 難波洋三 2006「朝日遺跡出土の銅鐸鋳型と菱環鈕式銅鐸」『埋蔵文化財調査報告書 54 朝日遺跡（第13・14・15次）』（『名古屋市文化財報告』69）、名古屋市教育委員会

國下多美樹（文学部教授）